
ぱいなっぷる

秋奈とら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぱいなっぷる

【コード】
N1000K

【作者名】
秋奈とら

【あらすじ】
ちよつとナルシストな赤神葵

捻くれすぎな女の子紀田真白

ネジの外れたクラスメイト甘楽文月

スポーツ万能男前な女の子の東雲薪乃

そんな4人が送る学校舞台のお話です！

第1話

葵と真白

高校2年 季節は梅雨 赤神葵、下校中。

日課は毎朝、某放送局、某番組のお天気ニュースを見ること。

だが、高校生男子の俺は天気予報を見ているわけではない。俺はお天気お姉さんだけを見ているのだ。

だから、その日一日晴れようが曇りようがハリケーンが来ようが、お天気お姉さんに夢中な俺は知りようがないのだ。

だから、だから…

今日、夕方から雨が降るなんて知らなかったわけだ。うん。

そんなことだから、今現在俺は下校途中にある古い感じの…
ていうかボロくなって今にも壊れそうな空き家で雨宿りしている。

もちろん中に入る勇氣は怖くて出ないので屋根になっている部分に
こじんまりといるわけだ。

「ちっ…悔しいから天気予報が間違ってた、ってことにしちゃおう
かなー…ってそれじゃーお姉さんが間違えたみたいじゃん！」

空しい一人突っ込みが入った。

すでに15分ほどはこんな感じだ。夕立だしすぐ止みそうーとか思
ってたのに…

仕方ない。
濡れ帰ろう！

「…いや、ぬれるのはなー…ちょっと寒いしなあ…」
また一人つぶやきながら、
意味もなく辺りを見回したりしている

あれ？

なんかうちの高校の制服が見えたような…

幻術！？俺は寒さでとうとうそんなものを！？
だって、こんな住宅街から外れたところに家あんの学校だと…
ていうか、この辺りでも俺ぐらいだぞ！？

だが、その制服の小柄な影はどんどん近づいてくる。

これはチャンスだな！

よかつたら入れてくれるかも！

しかも相手は女の子だ！

傘で顔は見えないけど、スカートは見えるからまちがいない！

一年生か？背が低いし。

とにかく！俺はラッキーだ！

なんてったて俺は自分で言うのはかなり痛いけど、
けっこうない顔している。

髪は暑苦しくなくくらいに伸びていて、
筋肉は付くところにしっかり付いていて、いかにもスポーツ爽やか
青少年的イメーヂ。

(本当はスポーツはやっていないけどね)

まあ女の子ならあいあい傘ぐらい他人だろうが、
ぜんぜんしてくれるだろう的なルックスなのだ。

あ、これは一般論だからな。うん。

そんな自惚れたことを考えながら、近づいてきた女の子に声をかけ
た。

「あの！君、若葉校の子だね！実は俺、傘なくて困ってて、それ
で…」

そこまで言っと思わず言葉に詰まってしまった。
詰まってしまったというか、見とれてしまったのだ。

なぜなら、俺の声に気づいて傘を持ち上げてくれて、見えた…
初めて見えたその子が

あまりにも可愛かったから。

俺は言葉が出なかった。

何も言えずに、ただ
その子に見入ってしまったのだ。
少し、自分でも困惑しながら

だって俺が他人に見とれてしまうなんてこと
今までになかったから。

その顔はまだ幼さが残った顔立ち。
下手したら小学生に間違われてしまつぐらいにあどけない。
前髪が短く切られているから余計に。

そして腰まで届く長い後ろ髪を
二つに結んでお下げにしているのがまた
可愛い…

童顔だからか！？背が低いからか可愛く見えちゃうのか？

いやいやいや！
確かに175cmの俺の胸より下ぐらいの身長だが、
このぐらいの背丈ならクラスにも数人いたし…

だから、とにかくこの子は
可愛い…

「ねえ。それで、何なの？
急に黙らないでください。

てゆうか誰ですか？不審者ですか。
こんな廃墟に一人で立つてるなんて。怖いです。」

「え！イヤ！イヤ！違うよ！
俺は2年の赤神葵っていいまして、
好きな食べ物は一…」

って！何を言おうとしているんだ俺！好きな食べ物って何だそのべ
たなテンパリ方は！

「……………食べ物……………」

「…じゃなくて、その…」

俺、傘もってなくてさ

よかつたら入れてくれない？なんて」

言っちゃった。よくぞ言えた。

普段女の子相手でごんなに気を使っちゃうことってあるか？

なんかもう冷や汗ダラダラだぞオイ。この俺が…！！
断られないだろうがな！

そんなことを思っていたら、

女の子が自分のスクールバックをあさり始めた。

どうしたのかと思って見ていたら、そのバックの中からは…

「ハイ。これ。わたし折りたたみ傘も持ってるからこっち、
貸します。二人で入ったんじゃないや濡れちゃうから」

と言って渡してくれたのは、

フリフリのレース 全体がピンク色
おまけに、

先端部分には可愛いウサギまでついている!!

そんな折りたたみ傘なのだ!

「あ、えっと…」

「この傘、かわいいでしょ?お気に入りなんだ。」

「う、うん!づんごく可愛いね!ありがとう!あはははは」

「えへへへへっ」

なぜこんな可愛いいかにも女の子な傘を!?

だって、君が使っている傘は水色の無地の傘じゃないか!!

なんで、折りたたみ傘はこんなにプリーティーなのさ!

貸してくれたことは、

ものすんごく嬉しい。

だが、欲を言うなら

君がさしている無地の傘の方を貸してくれー!!

だが、そんなこと、決して口にだしては言えない。

「…ほんとうに…ありがとう…あはっ」

そんなことを言う俺を不機嫌に眉をしかめながら上目使いで見てくる彼女。

「ねえ、その傘でホントにいいの？」
「え？」

「まあ、うれしそうで何よりです。
嫌だったら、こっちの水色の傘を
貸そうと思ってたけど。」

「ええ？」

「じゃあ。さようならです」
「えええええ？」

そういつて立ち去ろうとする彼女。
あほみたいな顔をしているであろう俺。

何か言おうと色々考えるが
頭が回らない

そして、一生懸命絞り込んで出た
俺の言葉は…

「あの！名前と学年教えて！この傘、明日返すから！」
立ち去ろうと歩き出してた彼女だが、

その声いきよとん、と驚いた顔で振り向いた。

そして、その驚いた顔のまま、
ただ質問に答えてくれた。

「……………2年……。紀田真白……………です……。」

小さい彼女は小さい声で
名前を教えてくれた。

それがはじめて俺が

ありえないくらい捻くれた女の子に出会った日。

小さくて可愛い女の子の出会った日。

真白に出会った日。

第1話（後書き）

はじめまして！トラ、といます！

初心者でして、どうしていいかわかりませんが、
どーか！暖かい目で見てください！

そして、第一話…けっこう恥ずかしい感じになってますが…／／／
こちら、暖かい目で見てください！

第2話

葵と傘

朝。7時20分ちよい前。
毎朝の日課のお天気ニュース。
もとい、お天気お姉さん。

でも、今の俺には、
お天気お姉さんが視界に入っていない。

あんなに毎朝ガン見してたのに。
あんなに可愛いつて見てたのに。

「って、のんきなこと考えてる場合じゃねえ！
時間が…もう行かなきゃやべーな！」

そして、テレビの電源を消し、
出発しようとした。

だが、ひとつ忘れ物。
朝食用のテーブルの上に
おいてある、ソレ、

「これ忘れちゃ今日学校行く意味ねーよな」

「ソレ、を手にると、思わずニヤケル。」

フリフリでピンクのウサギの傘。

そう、昨日真白が貸してくれたものだ！

それを大事に通学用のエナメルバックの中に入れ
俺は学校に向かった。

第3話

葵と文月

学校に着いた。

よし、真白を探そう！

つといきこんでみたが、ここで重大なことに気づく。

(あれ？真白って2年生だって言ってたよな？何組だ？)

俺はもう、1年以上この若葉高校にいるが

あの子のことは見たことがない。

見ていたら気づくはずだよな。あんな可愛い子。

「ん

！？」

ああなんで俺は気づかなかったんだ

どんだけ浮かれてたんだよ俺…

急に恥ずかしくなってきた

……とりあえず、職員室で先生にでも聞いてくるかな……
冷静になってそうすることにした。

階段を登り職員室に向かう廊下の途中、

「おー……い！あっおいしい！おっはよーうー！」
妙に長いあいさつ。そしてバカ丸出しの声でした…

「おーす」

「あつれえん？今日は機嫌いいねえ！あははは……！
なにかいいことあったのお！？」

「ていうか、教室逆方向だよお！どこ行くのお??？」
つく…。

朝からハイテンションなこいつは甘楽文月。

俺の知る中で一番あほな…いや、あほというよりは
頭のネジが何本か外れている男だ。

中学のときに部活が一緒に仲良くなった。

「ん〜。ちょっと職員室にな」

「えー!?!?!しよしよしよ、職員室だつてええ!?!?!?」
驚きを表すポーズなのか

片足を前に上げて両手を胸の前でクロスしている。

「なんでそんなに驚くんだよ」

「赤神、お前も教室行くんだよ」

何かにぶつかった。

「あ！中池先生！おっはあ〜！」

「おはよう、甘楽。…おっはあ、はねーだろ」

中池総汰先生、俺と甘楽の担任教師で社会科顧問。

「つと、そんなことはいいから、もうチャイム鳴るぞ。教室に行った行っただ〜。」

「えっ！」

思わず声を上げた！

いつもより早く出たと思ったのに…

「あんれれえん。もむそんな時間なんだねえ。

じゃあ早く行こうよ葵ちゃん！」

文月が俺の腕を引っ張る！

「ちよ、ちよっと待て文月！俺は職員室にい…

っていつか中池でもいいから話が！

だから、放せ馬鹿！〜！」

だが放してはくれない！

「ああああ〜〜〜〜〜…真白〜…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1000k/>

ばいなっぷる

2011年10月6日20時45分発行